

## 審査の結果の要旨

氏名 篠ヶ谷圭太

本論文は、効果的な予習指導を行うために、予習が授業内容の理解に与える影響とそのプロセスについて、心理学的な視点や研究方法を用いて検討したものである。

まず第Ⅰ部では、学力をめぐる議論を概観した上で予習指導の重要性について論じている。また、予習—授業—復習という学習フェイズの視点から従来の教科学習研究の分類を行うことにより、予習の効果や指導について新たな示唆が得られることを指摘している。

第Ⅱ部の第3章と第4章では、数学と英語の学習を対象として3つの予備調査を行い、事前に授業に関する知識を得ておき、自分なりの推論を行っておくことで、授業では、重要な情報に注意を焦点化させ、理解が深められるようになる可能性を示している。また、第5章では、予習時と授業中の方路の関連は、授業のしかたに依存することを示している。

第Ⅲ部では、中学生の歴史学習を対象として5つの実験授業を行い、予習から授業理解に至る情報処理プロセスについて詳細に検討している。まず、第6章と第7章では、事前または事後に教科書を読む群の比較を行い、事前に知識を得ておくことによって、授業では個々の歴史的事実の背景の理解が促進されること、また、そのような効果は学習者の意味理解志向(知識の関連性の理解を重視する態度)が高い場合に大きいことを示している。

こうした知見を踏まえ、第8章で効果的な予習活動のあり方を探索的に検討した上で、第9章、第10章では予習中の具体的な処理活動に介入を行い、予習から授業理解に至るプロセスの検討を行っている。第9章では、学習者の意味理解志向が予習時の疑問の生成に影響を及ぼし、それが授業理解の個人差を生じさせていることを論じた。また、第10章では、予習時に教師から与えた問いに対して、自分なりに解答を作成させる、さらに、問いに対する自信度を評定させる、といった介入を行うことで、予習から授業理解に至るプロセスについて検討し、意味理解志向という個人差特性を克服する指導を提案している。

第Ⅳ部の総合考察では、第11章において、本論文の研究結果を統合的に説明するため、予習から授業理解に至るまでのプロセスモデルを提案し、そのモデルに基づいて、効果的な予習方法や、予習を指導に取り入れる際に注意すべき点について論じている。さらに、第12章では、本論文の限界にも触れながら、学術的および実践的意義について論じ、今後の研究の展望を述べている。

本論文は、これまでの教科学習研究では十分明らかにされてこなかった予習の効果とその個人差について、緻密なモデルと実証的な方法によって検討している。また、予習が授業内での学習に与える影響を検討する上で、教師の行う授業のしかたも考慮しており、家庭での学習法に関する研究と、授業での教授法に関する研究の新たな接点を見出し、今後の教育心理学の展開に大きく貢献するものである。また、予習を指導していく際の注意点を具体的に示していることから、教育実践に対する意義も認められる。以上の理由により、本論文は博士(教育学)の学位にふさわしい論文であると評価された。